

別府大学の大学祭に関する一考察

― 石垣祭の開催回数のもつ意味・歴史的変遷を手がかりに ―

今井 航 甲斐 敬之¹⁾

【要 旨】

別府大学の大学祭である石垣祭は2016（平成28）年に71回目を迎えた。戦後まもなく開校した別府女学院で第1回が開催され、その後、別府女子専門学校、別府女子大学で開催回数を重ね、現在に至る。九州地区の各私立大学の大学祭開催回数と比べると、活水女子大学の大学祭である螢雪会の132回に次ぐ多さであった。また、学校と学生、そして地域社会が協同し、かつ学術と祭りが融合する形で開かれていたことが判った。

【キーワード】

別府大学 大学祭 石垣祭 開催回数 歴史的変遷

はじめに

別府大学の大学祭である石垣祭は2016（平成28）年に71回目を迎えた。1年に1度の開催であると仮定すれば、別府大学の前身である別府女学院が開校した1946（昭和21）年に第1回が開催されたことになる。別府大学の歴史からみても、古くからある行事であるといえる¹⁾。

別府大学の石垣祭とはなにか。この問いを持ちながら、本稿では石垣祭の位置づけ及び歴史的変遷を明らかにしようとする。開催回数でみた場合に、九州地区にある各私立大学の大学祭と比べて何がいえるのか。また、71回分を可能な限りで大観すると、石垣祭はどのように展開してきたのか。

位置づけ及び歴史的変遷を明らかにすることにより、石垣祭のもつ特質を明らかにする手がかりを得たい。その上で、提案も行いたい。

なお、開催回数は、各私立大学の公式ホームページや大学祭の公式 twitter、大学祭の公式 Facebook などで調べた。また、別府大学の大学祭の歴史は、各回のパンフレット、あるいは大分合同新聞や今日新聞などの各種地元新聞、さらには別府大学の記念誌などを参考に検討した。

1) 福徳学院高等学校 講師（平成28年3月文学部史学・文化財学科卒業）

1. 九州地区の各私立大学の大学祭開催回数からみる石垣祭の位置づけ

九州地区の各私立大学の大学祭開催回数、大学祭名、初回開催年を調査し、その結果をまとめたものが表1～3の各表である。ここでは開催回数が判明した大学のみを取り上げた⁽²⁾。また、初回開催年は1年に1度の開催を仮定し、2016（平成28）年の開催回数からさかのぼって算出した。

これら表1～3の各表から各私立大学の開学年と初回開催年を比較すると、以下の3点を指摘できる。

1 点目は大学開学年が初回開催年と同じと見られる場合である〔表1〕。この例としては、九州共立大学の霜月祭が挙げられる。霜月祭は、九州共立大学の開学年である1965（昭和40）年に第1回が開催された。このような大学は九州共立大学の他にも14校ある。

〔表1〕九州地区の各私立大学の大学祭開催回数—大学開学年と初回開催年が同じと見られる場合—

大学名	大学開学年	回数	大学祭名	初回開催年
福岡大学	1956年	61	七隈祭	1956年
九州産業大学	1960年	57	香椎祭	1960年
九州共立大学	1965年	52	霜月祭	1965年
沖縄国際大学	1972年	45	沖国大祭	1972年
久留米工業大学	1976年	41	愁華祭	1976年
志學館大学	1979年	38	銀杏祭	1979年
宮崎産業経営大学	1987年	30	古城祭	1987年
鹿児島純心女子大学	1994年	23	White Lily Festival	1994年
九州情報大学	1998年	19	紫苑祭	1998年
九州看護福祉大学	1998年	19	優愛祭	1998年
九州保健福祉大学	1999年	18	九保祭	1999年
長崎国際大学	2000年	17	開国祭	2000年
聖マリア学院大学	2006年	11	マリア祭	2006年
福岡女学院看護大学	2008年	9	NURSING FESTA	2008年
保健医療経営大学	2008年	9	たかやな祭	2008年

注) 回数は2016（平成28）年度現在である。

2点目は大学開学年よりも初回開催年が後と見られる場合である〔表2〕。この例としては、九州国際大学の橘祭が挙げられる。橘祭は、九州国際大学の開学年である1950（昭和25）年から5年後の1955（昭和30）年に第1回が開催された。このような大学はこの他にも18校ある。

〔表2〕九州地区の各私立大学の大学祭開催回数—大学開学年よりも初回開催年が後と見られる場合

大学名	大学開学年	回数	大学祭名	初回開催年
西南学院大学	1949年	67	西新百道祭	1950年
九州国際大学	1950年	62	橘祭	1955年
久留米大学	1950年	51	あのか祭	1966年
筑紫女学園大学	1965年	51	筑紫祭	1966年
福岡工業大学	1963年	50	立花祭	1967年
中村学園大学	1965年	50	霜月祭	1967年
西日本工業大学	1967年	49	美夜古祭	1968年
熊本学園大学	1954年	49	託麻祭	1968年
日本文理大学	1967年	49	一木祭	1968年
崇城大学	1967年	48	井芹祭	1969年
西九州大学(神埼キャンパス)	1968年	47	ひのくま祭	1970年
福岡歯科大学	1973年	42	田の歯科祭	1975年
産業医科大学	1978年	38	医生祭	1979年
九州ルーテル学院大学	1997年	19	フィリア祭	1998年
鹿児島国際大学	1960年	17	遊華俤祭	1999年
福岡国際大学	1998年	15	風早福国祭	2002年
立命館アジア太平洋大学	2000年	14	天空祭	2003年
南九州大学(宮崎キャンパス)	1967年	12	きりしま祭	2005年
第一薬科大学	1960年	8	薬大祭	2009年

注) 回数は2016（平成28）年度現在である。

3点目は大学開学年よりも初回開催年が前と見られる場合である〔表3〕。このような大学は13校あり、長崎県に多く見られる。この場合を更に細かくみると、以下の2点を指摘できる。

まず、各私立大学の前身である短期大学時代に初回が開催され、開催回数を重ねている場合である。ただし、九州栄養福祉大学の場合は現存する東筑紫短期大学時代に初回を迎えている。

次に、旧制大学時代に初回が行われている場合である。この例としては、活水女子大学の螢雪会が挙げられる。活水女子大学は1879(明治12)年に活水女学校として開学し、その5年後の1884(明治17)年に第1回が開催され、その当時から回数を重ね、2016(平成28)年には132回を数えている。

〔表3〕九州地区の各私立大学の大学祭開催回数—大学開学年よりも初回開催年が前と見られる場合

大学名	大学開学年	回数	大学祭名	初回開催年	備考
活水女子大学	1981年	132	螢雪会	1884年	1879年、活水女学校開学。1950年、活水女子短期大学開学。1981年、活水女子大学開学。
別府大学	1950年	71	石垣祭	1946年	1946年、別府女学院開学。別府女子専門学校を経て、1950年、別府女子大学開学。1954年、別府大学に改称。
尚絅大学(九品寺キャンパス)	1975年	64	尚絅祭	1953年	1952年、熊本女子短期大学開学。1975年、尚絅大学開学。
長崎外国語大学	2000年	61	外語祭	1951年	1950年、長崎外国語短期大学開学。2000年、長崎外国語大学開学。
沖縄大学	1961年	57	沖大祭	1960年	1958年、沖縄短期大学開学。1961年、沖縄大学開学。
九州女子大学	1962年	56	華秋祭	1961年	1960年、九州女子短期大学開学。1962年、九州女子大学開学。
長崎総合科学大学	1965年	53	造大祭	1964年	1950年、長崎造船短期大学開学。1965年、長崎造船大学開学。1978年、長崎総合科学大学に改称。
沖縄キリスト教学院大学	2004年	52	キリ学祭	1965年	1959年、沖縄キリスト教学院短期大学開学。2004年、沖縄キリスト教学院大学開学。
福岡女学院大学	1990年	51	葡萄祭	1966年	1964年、福岡女学院短期大学開学。1990年、福岡女学院大学人文学部開学。
長崎純心大学	1994年	51	純心祭	1966年	1950年、純心女子短期大学開学。1994年、長崎純心大学開学。
長崎ウエスレアン大学	2002年	49	\$ 2 祭	1968年	1966年、鎮西学院短期大学開学。2002年、長崎ウエスレアン大学開学。
九州栄養福祉大学	2001年	46	大学祭	1971年	1950年、東筑紫短期大学開学。2001年、九州栄養福祉大学開学。
熊本保健科学大学	2003年	40	杏祭	1977年	1968年、銀杏学園短期大学設立。2003年、熊本保健科学大学開学。

注) 回数は2016 (平成28) 年度現在である。

以上を踏まえ、別府大学の石垣祭の開催回数からは、どのようなことが言えるのか。まず、石垣祭は大学開学年よりも初回開催年が前と見られる。次に、初回開催年が1946（昭和21）年と見られ、別府女学院時代、すなわち旧制大学時代に初回が開かれていたといえる。九州地区の各私立大学に限ってみれば、旧制大学時代から開催回数を数えていると見られるのは、別府大学の石垣祭と活水女子大学の螢雪会のみであると言える。

これらのことから、別府大学の石垣祭は活水女子大学の螢雪会に次いで歴史が長く、現在の大学制度が整う以前から開催を重ねている数少ない大学祭であるといえる。

2. 石垣祭の歴史的変遷

では、2016（平成28）年に71回目を迎えた石垣祭は、具体的にどのような歴史をたどってきたのか。これを各回石垣祭のパンフレットや、各種地方新聞記事や別府大学の記念誌などからみていく。

①石垣祭の黎明期

第1回の石垣祭は1946（昭和21）年12月15日に「クリスマス文化祭」という名称で行われた。

会場は現在の別府大学がある場所ではなく、別府市公会堂（現在の別府市中央公民館）で行われ⁽³⁾、同校生徒120名が全員参加し、音楽歌謡や舞踊、劇など31ものプログラムがあり、社会科学生徒の喫茶部、文芸部員の手芸バザーは客の人気を呼んだ（【資料1・2】参照）。

1949（昭和24）年に別府女子専門学校を卒業した女性は、この第1回の文化祭について、「カルチャーショック」が文化祭を立ち上げたと述べている。この「カルチャーショック」は、同年に開学した別府女子専門学校の教授・講師陣のモダンな雰囲気や、建学の精神、授業での英語やラテン語が飛び交う風景などによって生まれたようである（【資料3】参照）。また、この頃の学校内の様子について、佐藤義詮氏は、「あの暗い、荒廃しきった社会に対して、学生、生徒達が求めた明かるさであった」と述べている⁽⁴⁾。

【資料1】⁽⁵⁾

別専の文化祭

別府女専のクリスマス文化祭は15日午前10時から別府市公会堂で開き音楽歌謡、舞踊のほかバザーを催し喫茶部を開店する。

【資料2】⁽⁶⁾

賑つた別女の文化祭

別府女学院のクリスマス文化祭は15日午前10時市公会堂で催された。同校生徒120名が総出演のうえ

大阪音楽学校ソプラノ佐藤和愛 京都若草学園教授ソプラノ小幡和代

本年度コンクール入賞者ピアノ長井克子、舞踊藤間福素娥、同竹内永子さんらの賛助出演があつて舞台を賑わした。

独唱、重唱をはじめ劇、舞踊など31組の盛り沢山なプログラムを上演、とくに同校教授加藤柔郎氏の手による劇「荒城の月物語」は好評を博し、社会科学生徒の喫茶部と文芸部員の手芸品バザーは一層客の人気を呼び午後5時幕を閉じた。

【資料3】⁽⁷⁾

学長(創始者佐藤義詮)をはじめ、居並ぶ教授陣のモダンな風格にショックを受けました。学長の式辞に「真理は我らを自由にする=VERITAS・LIBERAT」があり、再びショック。更に授業が始まるや否や、英語はもとより、独・仏・露・ラテン語等、今まで目にも耳にもしなかった外来語が黒板や教室の空気を染めていく状態は、正しくカルチャーショックでした。(後略)。

私たちのカルチャーショックは遂に文化祭(現 石垣祭)を立ち上げ、公会堂(現 中央公民館)で、生意気にもシェークスピア原作の英語劇や、ミュージカルまがいの「青い鳥」等を上映しました。

②1960年代～70年代の石垣祭

ここでは第18～34回の石垣祭(大学祭)の様子をみていく。

まず、第18回(1963年)から第23回(1968年)までは、別府大学と別府大学の自治組織である学生自治会が共催するという形式がとられていた。なお、第24回(1969年)から第29回(1974年)までは学生自治体の主催で実施された。

次に、第18回(1963年)から第25回(1970年)の大学祭は、現在の会場である別府大学はもちろん、別府タワー、別府国際観光会館などでも行われた(【資料4】参照)。しかし、第26回(1971年)以後は仮装行列を除き、別府大学の敷地内のみで行われている。

第21回(1966年)までは「学園祭」という名称であったが、第22回(1967年)からは「大学祭」と改称され、自治会の行事となった⁽⁸⁾。また、現在の「石垣祭」へと名称を変えたのは第34回(1979年)からであった(【資料6】参照)。

第22回(1967年)の大学祭からは、模擬店と学習研究発表がプログラムに盛り込まれた⁽⁹⁾。

第18回(1963年)の学園祭では、開催直前にアメリカのケネディ大統領が暗殺されており、追悼パレードが行われるなど、政治に関する催し物もあった(【資料5】参照)。

しかし、1970年代後半ごろから、徐々に政治色が弱まっていった。この傾向は全国的なものであり、大分合同新聞1975年11月4日(朝刊、7面)では、「大学祭 すっかり脱政治化」という記事が掲載されている。また、第32回(1977年)からは、現在の石垣祭につながる企画(ミス・キャンパス等)が行われるようになった。

第31回(1976年)までは、大学祭の中で体育的行事(体育祭)も行われていたが、第32回(1977年)以後は文化的行事のみ行われている。

第30回(1975年)には大学祭の費用の不足がきっかけとなり、ハンガーストライキを起こし、開催自体が危ぶまれたが、自治会費からの支出により、ようやく開催することができた。(【資料7・8】参照)。

【資料4】⁽¹⁰⁾

別府大学祭始まる

大分合同後援の第18回別府大学祭は、21日から24日まで4日間、同大学、別府国際観光会館、別府タワーの3会場で開かれている。

21日は午前10時から同大学グラウンドで、各科対抗のバレーボール、ソフトボール、テニス、卓球の各試合が行われた。また午後6時から同大学学生会館で、クラシックやポピュラーのレコードコンサートが開かれたほか、同6時から同大学グラウンドで、コーラスやフォークダンスを織り込んだフェスティバルショーと「グラウンドファイヤー」が行われ、火を囲んで踊ったり歌ったりして楽しんだ。

22日以降のおもな行事は次のとおり。

【22日】▽討論会（午前10時・大学内）▽元国立別府病院長高安慎一氏の記念講演「温泉にたいする認識の変せん」（午後1時・大学講堂）▽映画会（午後3時・同大学合併教室）

【23日】▽学園文化祭（午前10時・別府国際観光会館大ホール）▽各種展示会（午前10時・同会館第一会議室）▽バザー（正午・同会館見本市会場）▽ダンスパーティー（午後6時・別府タワー）

【24日】▽大分県俳句作家交流会（午後1時・別府国際観光会館見本市会場）

【資料5】⁽¹¹⁾

“ケ大統領”の好きだった曲 = 別府大学祭に参加の宮崎高バンド = 市中パレードの途中、追悼演奏

大分合同後援第18回別府大学祭4日目は同日10時から別府国際観光会館でいろいろな講演会や音楽会、創作劇も披露され、盛会だった。また同時刻から別大付属高校の姉妹校宮崎高校も特別参加、70人のバンドがバトンガールを先頭に市中パレードした。一行はケネディ米大統領の死去をいたんで、途中、駅前通りと山の手のカ所で同大統領が生前好きだった「海兵隊」などいろいろな行進曲を演奏。黙とうをささげた。

【資料6】⁽¹²⁾

我々学生間だけでなく、一連の教育機関の場として、勿論、地域社会との交流の意を踏まえて、伝統的な『大学祭』という名から『石垣祭』という名に改めました。

【資料7】⁽¹³⁾

「大学祭の補助金が少ないゾ」別府大学学生2人がハンスト

別府大学では学生自治会などが中心になって15日から大学祭を催す予定だが、開催費の大学側補助金をめぐって、学生側と大学側が対立、学生2人が7日午後1時からハンガーストライキに入った。大学祭は今年で30回目を迎えるため、学生らは9月初め、全学実行委員会（佐藤俊尚委員長）を設け、各サークル、クラス総参加の大学祭を計画した。この予算が136万5000円。うち自治会費、広告などで54万円を同委員会でまかない、残りを大学側の補助によることを学生たちが要求している。

これまで二宮学生部長と学生代表約60人の間で、6回の交渉や団交が行われたが、大学側は①自治会活動としての大学祭は本来、学生の力でやるもの②例年程度の15万ぐらいなら援助できるとして折り合いがつかず、この日、学生代表によるハンスト入りになった。

【資料8】⁽¹⁴⁾

商店街を仮装行列 別府大学祭始まる

別府大学祭が15日から始まり、初日は学生らの仮装行列が市街地の通りや商店街を巡り、市民や観光客から拍手を浴びていた。今回のテーマは「新たなる共同性の産出」。文学部、短期大学の学生約300人が各クラス、サークルごとに仮装して行進、市内銀座街では沖縄県人会の学生約30人が郷土色豊かにジャ味線、太鼓や指笛を鳴らして踊りを舞い、氣勢をあげた。ことしの大学祭は開催費用をめぐって大学側に反発した学生2人がハンストをやったりしたが、自治会費からの支出で開いたという。

③1980年代の石垣祭

1980年代の石垣祭は、1960～70年代前半までに見られた、政治色は影をひそめ、現在のようなステージ企画などバラエティ豊かな内容が目立つ（【資料9・10】参照）。

また、他大学からの参加が見られた。例えば、第36回（1981年）には大分大、芸短、工大、福大（表記はパンフレットのまま）、第37回（1982年）には芸短、東海大、医大（表記はパンフレットのまま）などが参加している。

さらに、第39回（1984年）には、附属看護専門学校も石垣祭に初参加した（【資料11・12】参照）。ただし、第42回（1987年）では実行委員からの選出がなく、参加しているかは不明である。参加しなくなった時期については、第40～41回のパンフレットは欠番であるため不明である。

【資料9】⁽¹⁵⁾

行事多彩に石垣祭 別府大学の学園祭にぎやか

別府市北石垣、別府大学の学園祭「第40回石垣祭」（実行委員長、国文学科3年藤井隆司さん）が22日開幕した。前夜祭でダンスパーティーを開いた後、この日は、学内に模擬店がズラリ。「Together」（一緒に）をテーマに、24日まで多彩な行事が続けられる。

初日は地下ホールで開かれた仮装コンテストの“出演者”たちが駅前通りまで“遠征”して氣勢をあげた。学内では「ザ・ガマン別大編」や野外コンサートがあり、サブタイトルの「われわれ生涯最良のとき」をおう歌していた。

期間中、映画上映、空手演武、フィーリングカップル、別大ギネスに挑戦、青空市場、沖縄県人会舞踊などの企画が用意されており、「連休は、ぜひ石垣祭へ」とPRしていた。

【資料10】⁽¹⁶⁾

仮装パレード練る 別府大学の石垣祭

別府大学の石垣祭（白石清実行委員長・学生2004人）＝大分合同後援＝が21日から始まった。23日まで。

初日は、午前9時から名物「仮装パレード」で幕開け。パレードには、演劇部や学内の沖縄県出身者でつくっている沖縄県人会、心理学研究部など9団体から学生約100人が参加。大学通り、別府駅前通りや中心商店街をパレードした。

キャンパス内では、青空市場、野外コンサート、ミスターキャンパス選彰会、仮装コンテスト、各サークル展などでにぎわった。

2日目の22日は、午前10時から学内スポーツ振興会発足10周年記念式があり、同大学卒業生で東京オリンピックなどで大活躍をした水泳の“エッコさん”こと佐々木栄子（旧姓：高橋）さんの記念講演会や、ペア・カラオケ歌合戦、映画会、サークル展、ごはん炊きコンクールなどがあり、23日は、演劇会、チャリティー映画「あしたのジョー2」の上映、学生混声合唱団のドミニーステージ、ミスキャンパス選彰会、書道展や席上揮ごう会などがある。

【資料11】⁽¹⁷⁾

芸短大 別府大でも 盛大に学園祭

別府大学の「石垣祭」（大分合同後援）が1日夜から学内で始まった。4日まで。

「焦点」をメインテーマに今年が39回目。サブテーマは「見つめなおそう我らの時代（とき）を」。今年からは同大学付属看護専門学校も初参加。初回は午後6時からダンスパーティーが行われた。

【資料12】⁽¹⁸⁾

私たち別府大学附属看護専門学校の学生の強い要望により、第39回石垣祭への参加を承認いただきまして、はじめて石垣祭へ参加することになりました。

④1990年以降の石垣祭

1990年代の石垣祭は、いわゆる名物行事の廃止や実行委員会の常設化などがあった。

第46回（1991年）には石垣祭の実行委員会が常設されるようになった。この回の実行委員である大石将器氏は、「実行委員会が一つの組織として、また一つのサークルとして独立した形に置かれました」と述べ、文化会会長の屋敷硬司氏は、「例年のように大学祭期間中のみの実行委員会ではなく、サークルの形態をとった機関として活動していく全く新しい実行委員会です」と述べている。しかし、第51回（1996年）には「大学祭実行委員会」が発足している。これは、前述の常設の実行委員会とは異なるものなのかは不明である。

第48回（1993年）を最後に、これまで行われていた仮装パレード（仮装行列）や前夜祭、後夜祭は行われなくなり、これまで3日間にわたって行われていたものが、第49回（1994年）からは2日間に変更された。

第51回（1996年）から第59回（2004年）までは別府市が後援として参加しており、パンフレットには別府市長のコメントも掲載されていた。このことから、石垣祭はただ単に大学だけのお祭りとしてではなく、地域のお祭りとしての役割を担う存在となったことがわかる。また、同回からは留学生が参加する企画もはじまり、国際色も表れる大学祭となった。

2000年代に入ると、現在の石垣祭のスタイルが形成されることとなった。

第58回（2003年）からは、これまで3号館ホールと特設ステージの2会場だったものが、現在のように特設ステージの1カ所のみに変更された。

第59回（2004年）からは、別府大学にあるサークルや、イベント広告等から、個人広告の募集が始まった。また、同年には「主催」「後援」に加え、「特別協賛」も設けられ、スポンサーも増加した。

第62回（2007年）には、「模擬店コンテスト」を開催した。模擬店自体は第23回（1967年）から開催されているが、この中からナンバーワンを決めるコンテストは行われておらず、画期的な企画であるといえる。このコンテストは第69回（2014年）、第70回（2015年）、第71回（2016年）にも行われた。

3. 石垣祭の変容

石垣祭については、特に1980～90年代にかけて、大学祭のマンネリ化を指摘するあいさつ文が見られるようになる。

まず、学生の大学祭への関心が薄れることを指摘する声が1980年代前半ごろに出てきた。第37回（1982年）の実行委員長である廣兼正記氏は、「年々学生の関心が薄れて、サークル中心のサークル祭となる傾向が強くなりました。」と述べている。また、第42回（1987年）の実行委員長である白石清氏は、「年々石垣祭に対する学生の関心が薄れてきています」と述べている。

この傾向は全国的にもみられるようになり、第46回（1991年）の時に別府大学文学部学生部長であった橋昌信氏は、「昨今の大学はサークル活動の衰退と共に大学祭はマンネリだと言われる」と述べている。また、同年には、短期大学部学生部長であった横山泰治氏は、「どこの大学もそうらしいが、近ごろ大学祭は盛り上がりがなくマンネリだと言われる」と述べている。さらに、

第48回(1993年)の時に文学部学生部長であった阿部義郎氏は、「熊学園祭 今年限り?」という朝日新聞1993年9月23日(朝刊)を紹介し、その中の「政治など硬いテーマは敬遠され、娯楽色豊かな学園祭も年々派手になるばかりだが、それに反比例して、祭りの裏方を勤める実行委員のスタッフになり手が無い」という点を指摘した。

その結果、大学のサークル生以外は大学祭に参加することが減り、第37回(1982年)実行委員長である廣兼氏が述べたように「サークル中心のサークル祭」となった。これについて、第47回(1992年)の時の文化会会長である山崎実氏は、「過去2年間石垣祭を経験しましたが、時にサークル所属の学生の祭りになって活気が少し欠けているような気がします」と述べている。

このマンネリ化は1990年代にとどまらず、第55回(2000年)の時に別府大学短期大学部学生部長であった村田勝氏は、「大学祭が低調で、マンネリ化しているのがほとんどの大学の現状」と述べている。

この1980~90年代の指摘は、現在も同じであると思われる。特に、サークル生以外の参加の低下について考えると、筆者(甲斐)が学生であった頃を思い起こしても、石垣祭の企画等に参加している学生の多くがサークルに所属しており、一般の学生が企画に参加するケースは少なかったとみられる。原因としては、石垣祭の実行委員が文化会、スポーツ振興会というサークルの構成員から選出されていることが挙げられる。いわば、サークルの構成員が企画・運営している。このことが、サークル生以外の参加の低下の一因となっているのではないだろうか。

4. 石垣祭の性格

これまで、石垣祭の歴史的変遷について述べてきた。では、石垣祭とは何か。ここでは、各回石垣祭のパンフレットに見られる実行委員長・別府大学教員等のコメントから考える。

まず、第33回(1978年)の実行副委員長であった川谷内賢氏は、「石垣祭は、学校側がやってくれるのではなく、我々、学生一人一人が自らの手で創り上げてゆくことを、今回第33回大学祭で知ってもらいたい」と述べている。

次に、第44回(1989年)の企画局長であった岡田彰氏は、「大学祭とは、大学や大学祭実行委員が作るのではなく、全学生で創るものであります」と述べている。また、同回のパンフレットには、当時短大部長であった野中卓氏が、「石垣祭は、別府大学に集う学生諸君の連帯の祭典である」というコメントを寄せている。

さらに、第45回(1990年)の情宣局長であった山口信雄氏は、「石垣祭は、根本的には別府大学の全学生の祭りです。これは学校側の援助金と学生の運営費によって行われます。この両者の理解と協力がなければ、石垣祭はありません」と述べている。

そして、第54回(1999年)のパンフレットには、当時別府大学短期大学部学生部長であった金子進之助氏が、「アカデミックと祭りの微妙なる融合、これが大学祭と呼ばれるものであろうと考える」と述べている。

これらのコメントや、石垣祭という名称に込められた意味などを総合すると、石垣祭は、「学校側が取り組むものではなく、学校と学生、そして地域社会が協同して行う、学術と祭りの融合」と定義づけることができる。

つまり、石垣祭には学校、学生、地域社会という3つの要素が必要であると考えられる。

大学祭の定義について、大庭茂美氏は「学生が主体(学友会・自治会)となって大学の研究教育活動の公開や市民との交流、学部の壁を越えての交流融和 伝統の継承と創造(クラブ・サー

クルの絆)」を目的としている⁽¹⁹⁾。これを別府大学の石垣祭に当てはめると、ある問題点が浮かぶ。

それは、「大学の研究教育活動の公開」が少ないという点である。これまでの石垣祭をみると、第22回（1967年）では、学習研究発表が行われていたほか、史学科（現在の史学・文化財学科）の学生による学生研究発表会が行われていた。また、第48回（1993年）では「学内意識調査」とよばれる調査が行われており、その結果が同回のパンフレットに掲載されていた。このように、学生による研究教育活動の公開がたびたび行われていた。しかし、学習研究発表も少なくなり、前述の史学・文化財学科の学生による学生研究発表会も第68回（2013年）からは石垣祭と日程をずらして開催されることとなった。

また、現在の石垣祭では、ミス・ミスターコンテストやベストカップルコンテスト、器楽部などによるライブ、芸能人を招いてのお笑いライブなどがメインであるほか、メイン会場以外でもサークルの出店、各サークルの出し物などが行われている。しかし、第48回（1993年）までは仮装行列が行われていたほか、前夜祭・後夜祭というイベントも行われていた。また、1980年代には他大学の学生が石垣祭に参加していた。さらに、第52回（1997年）では人気バラエティ番組の取材が行われたほか、第50回（1995年）ではラジオの公開生放送も行われていた。つまり、以前のほうが現在よりも企画が充実していたと考えることができる。

おわりに

筆者が提案したいことが2つある。

1つ目は学習研究発表の場を増やすということである。これに関しては各学科等の都合があり実現は難しいことも考えられる。しかし、学科によっては研究サークルも存在している。そのようなサークルが研究発表をすることで、大学祭の定義として指摘されている「大学の研究教育活動の公開」につながるのではないだろうか。

2つ目はスタンプラリーの実施である。これに近い企画が第59回（2004年）で行われている。これは学内全体を使ったイベントであるので、企画に参加していない学生や、地域住民でも気軽に参加できる。一方、企画に参加している学生にとってもその企画の良いPRとなることができる。つまり、お互いにとってプラスとなる企画であると考えられる。

これら2つのことが、これまでの指摘でみられたマンネリ化の打開策となるのではないだろうか。

別府大学の石垣祭は、実行委員会が主体となり、地域住民の理解、協力のもとで他のサークルと協同で開催している。この点は評価されるべきことである。また、一度大学祭を中止した大学もある中で⁽²⁰⁾、70回以上も継続して行われているということは素晴らしいことであり、引き続き、継続してもらいたい。

注

- (1) 別府大学は1946年に別府女学院として開学し、旧制専門学校令による認可を受けた別府女子専門学校を経て、1950年に別府女子大学が開学され、1954年に別府大学に改称された。
- (2) 例えば、純真学園大学の純真学園祭や平成音楽大学の平成祭などは開催回数が判明しなかったため除外した。
- (3) 一方、第1回学園祭は、仏在住の佐藤画伯（表記ママ）の記念講演によると、鶴見園大ホールで開かれた、

とも書かれてある(※第20回パンフレットの「後記」)。このことから、会場については改めて検討する必要がある。

- (4) 「大学祭に際して」(第19回パンフレット)。
- (5) 大分合同新聞, 1946年12月10日(朝刊), 2面。
- (6) 大分合同新聞, 1946年12月17日(朝刊), 2面。
- (7) 「Be-news」No. 100, 2008年, 8頁。
- (8) 「第22回大学祭に思う」(第22回パンフレット)。
- (9) 第22回パンフレット「へんしゅうこうこ」〔表記ママ〕(第22回パンフレット)。
- (10) 大分合同新聞, 1963年11月22日(朝刊), 8面。
- (11) 大分合同新聞, 1963年11月24日(朝刊), 7面。
- (12) 七森啓輔「第34回石垣祭に向けて」(第34回石垣祭パンフレット)。
- (13) 大分合同新聞, 1975年11月8日(朝刊), 9面。
- (14) 大分合同新聞, 1975年11月16日(朝刊), 11面。
- (15) 今日新聞, 1985年11月22日, 3面より。
- (16) 大分合同新聞, 1987年11月22日(朝刊), 7面。
- (17) 大分合同新聞, 1984年11月2日(朝刊), 14面。
- (18) 高岡真奈美「あいさつ」(第39回パンフレット)。
- (19) 大庭茂美「大学開放の研究(13): 大学祭・寮祭を中心として」『日本教育学会研究発表要綱』71, 2012年, pp. 292~293。
- (20) 例えば, 第一薬科大学の薬大祭の場合は一度開催を中断していた時期があるものの, 学内の要望を受けて復活した。